主の祈り　(93-5A)

天にまします　われらの父よ
ねがわくは、み名をあがめさせたまえ
み国をきたらせたまえ
みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ
われらの日用の糧（かて）を、今日もあたえたまえ
われらに罪をおかすものを、われらがゆるすごとく
われらの罪をもゆるしたまえ
われらをこころみにあわせず、悪よりすくいいだしたまえ
国と ちからと さかえとは、かぎりなく、
なんじのものなればなり　アーメン

石巻栄光教会宣教基本方針

石巻栄光教会は，主なる神と出会うイエス・キリストの体です。神様が愛している一人一人のかけがえのなさを思い出し，この世界を神様が大切にしていることを思い出す場所です。石巻栄光教会は，希望を生み出します。

私たちは、この社会の現実の中で生きています。教会の中だけでの満足にとどまらず、社会に生きる人々の痛みや苦しみ、あるいは楽しみを共にしていくこと、そして、悩みや不安を分け合って喜びに変えていく教会になることを願います。

また、一人一人の生き方を尊重するとともに、神様から一人一人に与えられている賜物を活かして、神さまと人を愛し、感謝しながら地域に仕えていく教会を目指します。





日本キリスト教団 石巻栄光教会

〒986-0854　石巻市大街道北２丁目１２－３
電話／FAX：0225-22-4090
ホームページ：http://tohoku.uccj.jp/i-eikou
メール：i-eikou@tohoku.uccj.jp
振替口座：02280-8-2810
教会創立：1887年9月25日

集会案内

聖日礼拝	毎週日曜日	午前10：30
早朝礼拝	毎週日曜日	午前 7：30
交わりの会	毎週日曜日	礼拝後
み言葉と祈りの会	毎週水曜日	午後 7：30

2026年度標語　『これは、人の意志や努力ではなく、
神の憐れみによるものです』

◎ 聖日礼拝を共に守りましょう。
◎ 日ごと聖書に聞き、祈りましょう。
◎ 家族・地域に福音を届けましょう。
◎ 平和を創り出すために働きましょう。

No.2546　永眠者記念主日　2026年11月1日

礼拝順序

受付 司会 献金 奏楽	礼拝当番は 礼拝堂に集まった人の中で 可能な方に担当いただきます。

前奏		
招きの言葉	［33］詩編第51編19節	司会者
讃美歌	28	一同
	子どもたちへのお話 あるいは 悔い改めの黙祷	
讃美歌	５５　(1節)	一同
聖書	詩篇130編４節	
	(旧共同訳聖書の旧約聖書９７３ページ・または下記を参照)	
祈り		司会者
讃美歌	３００（1～2節）	一同
お話	「ゆるしはあなたのもとに」	
	石巻栄光教会 川上直哉　牧師	
讃美歌	３００（3～4節）	一同
献金		一同
報告		司会者
讃美歌	89	一同
祝福の祈り		
後奏		

＊当教会では 着席のまま礼拝を守っています。
＊旧約聖書は前半(P.1502まで)、新約聖書はその後ろです。
＊献金の額はいくらでも結構です。持ち合わせがないときは次の機会に。

∞〇∞〇∞〇∞〇∞ 本日の聖書 ∞〇∞〇∞〇∞〇∞

**しかしあなたには
ゆるしがあります。
あなたは人に
恐れ畏まれるでしょう。**

∞∞∞∞∞∞ 今週の集会 ∞∞∞∞∞∞

☆「墓前礼拝」11月1日(日) 12:00～ 石巻栄光教会墓所
☆「映画観賞会」11月3日(火) 10:30～ 石巻市博物館
☆「御言葉と祈りの時」11月4日(水)19:30～ オンライン配信

∞∞∞∞ 次週の予告（11/8）∞∞∞∞

☆ 主日礼拝（お話：川上直哉 牧師）

［聖書］	マタイ伝5章9節
［お話］	「幸せなのは 平和を作り出す人」
［讃美歌］	29　55　499　90　［招きの言葉］ 4
受付 奏楽	礼拝当番は礼拝堂に集まった人の中で 可能な方に担当いただきます。

∞〇∞〇∞〇∞〇∞ お知らせ ∞〇∞〇∞〇∞〇∞

✤今後の予定は以下の通りです

・11月29日(日)アドベント開始

・12月24日(木)日没から クリスマス

・1月1日(金) 新年合同礼拝(青葉荘教会にて・説教者は小西望先生)

・1月6日(木) エピファニー(公現祭)

・1月17日(日)宮城中地区との講壇交換

《 先週の集会統計 》			
聖日礼拝	11人	み言葉と祈りの会	－
早朝礼拝	2人	聖餐式	5人
月定献金		特別献金	
細川富代（10-3月）		細川富代 （クリスマス・永眠者記念・創立記念） 宮本旻祐師ご遺族（お花感謝） 石井龍子（クリスマス） 匿名５名（地区宣教協働）	
席上献金	¥10,500		

週報別冊

2026年11月1日号

1．教会宛に、以下の通信が届いています。

【日本基督教団石巻栄光教会関係】

- **「仙台青年」（仙台ＹＭＣＡ）**：当教会にセンターを構えてくださっている団体からの通信です。「熊本地震災害支援派遣スタッフ報告」（仙台ＹＭＣＡﾌｧﾐﾘｰｾﾝﾀｰ 尾木善宣さん）等が掲載されています。

【日本基督教団・東北教区関係】

- **「教団新報」（日本基督教団）**：「ありのままの自分が用いられる恵み」（日本基督教団福島新町教会員 菅野愛希さん）等が掲載されています。
- **「音楽受難劇」（受難劇を創る実行委員会）**：深田寛牧師が監修し、仙台松陵教会の鈴木優子さんが演出をして、尚絅学院中高で１１月２１日に行われる催事のチラシをいただきました。
- **「農」（農村伝道神学校後援会）**：日本基督教団の神学校の後援会からの通信です。
- **「中村教会のための宣教支援 緊急のお願い」（日本基督教団東北教区宮城相双地区役員会）**：日本基督教団中村教会が「近年は予算が組めないほどの危機的状況」にあり、その支援の募金を求めておられます。
- **「学報」（東京神学大学）**：同信伝道会のルーツとなる教会の、米国建国時の様子を報告する「ニューイングラド・ピューリタンにおける回心体験の意義――ジョン・コットンを中心として」（青山学院大学宗教主任 和寺遥佳さん）などが掲載されています。
- **「ひとやの友」（日本基督教団教誨師会）**：川上牧師も参加した７月の研修会の報告などが掲載されています。

【その他団体・教会関係】

- **「SINAPIS」（カトリック大阪高松大司教区社会活動センター・シナピス）**：「愛知県の佐藤さんには日系３世の一人息子がいます」と筆を起こす「息子、消えてしまったよ」等が掲載されています。
- **「オアシス」（カトリック東仙台教会）**：毎月エマオで行われている「荊冠の神学」読書会と聖餐式に参加くださっているクリスチアーナ・オリンガ・佐藤睦子さんの寄稿「２０２５年、聖年の年に」が、東北キリシタン巡礼の特集記事として掲載されています。
- **「ＦＥＢＣ１５６６」「福音は分かち合ってこそ」（キリスト教放送局 FEBC）**：川上牧師も先週収録をしたラジオ・インターネット放送局から、「クリスマス・キャンペーン」のお知らせが届いています。また、関川祐一郎先生の御父君のインタビュー「霊性の源流を訪ねて」（日本基督教団大森めぐみ教会牧師 関川泰寛さん）等が掲載されている期間をいただきました。
- **「２０２６東松島復興希望のコンサート」（東松島アメイジング・グレースセンター）**：１１月１７日（土）午前１０時から大曲市民センター多目的ホールで、「東日本大震災から１５年、希望を未来へ」と題して開催される無料のコンサートのチラシをいただきました。石巻好文館高校卒業生の竹下静さんなどが出演されます。
- **「ＴＡＭＢＯＵＲＩＮＥ」（ミクタムレコード）**：「リスタート〈５０周年感謝号〉」として、故 小坂忠さんたちが始めたクリスチャン音楽会社の通信をいただきました。

2．牧師動静

１０月２６日（月）

午前中、エマオで世界心道教の方と会議をし、午後、仙台ＹＭＣＡ常議員会に出席し、夜「スピノザ」読書会を主宰しました。

１０月２７日（火）

日中、日本基督教団東北教区宮城北地区婦人会協議会で講師を務め、夜、オンラインでFEBCの収録をオンラインでしました。

１０月２８日（水）

日中、休暇をいただき、夜、仙台で合唱のリハーサルに出席しました。

１０月２９日（木）

終日「支倉国際合唱祭」に参加しました。

１０月３０日（金）
日中、休暇をいただき、夕方、FEBCの収録をオンラインで行い、夜、反貧困宮城ネットワークの会議にオンラインで出席してから、「本田哲郎」読書会をオンラインで主宰しました。

１０月３１日（土）
午前中「荊冠の神学」読書会を主宰し、お昼に聖餐式をし、午後、エマオ25周年記念講演会に参加しました。

- 十勝ワイズメンズクラブから、「支援かぼちゃ」が届いています。「3.11」以来、石巻へ贈り続けて下さっています。先週、石巻栄光教会・栄光まきびと園をはじめ、ブレーメン、石巻モスクなどへ、川上牧師がお届けしました。また昨日は京都大学ＹＭＣＡの皆さんと、ウクライナから石巻に避難して来られているイリナさんに ひと箱、お届けしました。

- 今週火曜日、１１月３日の午前中、石巻市博物館にて「たまえちゃんのリードオルガン」記録映画の上映会がございます。関連して、バーデットオルガンの資料を準備しました。１０時に教会に集合くださいましたら、自動車に乗り合わせて参りたく思います。どうぞ、ご参加ください。

１１月２日（月）
「ふくしま YMCA」設立準備委員会の事業として、京都大学 YMCA の方々を福島県浜通りへご案内しています。

１１月３日（火）
午前中、石巻博物館主催の映画会に参加し、午後、仙台青葉城ワイズメンズクラブの催事に参加しています。

１１月４日（水）～６日（金）
長崎へ観光学の研修に行っています。

１１月７日（土）
「みちのく潮風トレイル」を歩いています。

※牧師と面会をご希望される方は、どうぞ、ご遠慮なく教会のメール宛、ご連絡ください。上記日程を調整して、お会いしたく存じます。

（1）第 32211号　昭和24年1月10日第3種郵便物認可(大正元年創刊)

温故知新聞
～過去の本紙から注目記事を紹介～



一生懸命に手を伸ばしてナシを取る園児

昭和の石巻　楽しくておいしいナシ狩り

石巻市大街道の栄光幼稚園の園児約190人が、門脇字三軒屋にあるナシ園でナシ狩りを楽しんだ。

園児らは幼稚園から1時間ほど歩いて到着。早速始めたが、大人の背の高さほどの棚に手が届かず四苦八苦。あちらこちらから「先生、先生」とお呼びがかかり、付き添いの先生方は大忙しだった。

子どもたちはもぎ取ったナシの皮をむいてもらうと大きな口を開けて丸かじり。目を輝かせて「おいしい！」という姿が随所で見られ、ナシ園を開放した所有者も満足した様子。

「一生懸命大きなナシを探し回る子どもたちは、その中から笑い顔の目と口の形にキズの付いたものを見つけ出し、宝物を発見したかのように大はしゃぎ。〝ニコニコナシ〟と命名して楽しんだ」という。（昭和56年10月28日）

石巻日日新聞　2026年10月27日付一面

事務局こぼれ話

ビスカルド篤子（あつこ）

息子、消えてしまったよ

愛知県の佐藤さんには日系３世のひとり息子がいます。息子は若い時に一度だけ服役した経験があり、以来ずっと仮放免の身でした。

ある日、佐藤さんから電話を受けました。

「息子が入管に出頭したまんま帰ってこんから、入管に電話したけど知らないって。どこ行った、ってずっと探してた。したらば、さっき息子から電話あった。お母さん、強制送還されて飛行機無理やり乗せられた。今、イスタンブールだよて。これからサンパウロに行く飛行機乗せられるって。」

佐藤さんの息子は、毎月入管に出頭を続けて10年でしたから、その日もいつも通り所持金も殆ど持たず手ぶらで入管へ行きました。

佐藤さんは日系一家で、息子は幼少期から日本に暮らし、日本語しか話せず顔も日本人にしか見えません。所持金なしの56歳の日本人が、何の予告もなしにいきなり異郷の地に放り出されたようなものです。

私たちは教会を通じて現地で助けてくれる人を探しました。でもうまくつながらず、結局佐藤さんの息子は人に助けてもらうまで、丸４日間も飲まず食わずで空港にうずくまっていたといいます。救出された彼は病院へ運ばれました。

一方、日本に残された母親も悲惨です。息子に在留特別許可が出る日を待ち望んで母子で支え合ってきましたが、突然息子を失った母親は、悲嘆に暮れる間もなく息子が住んでいた場所へ杖を突きつつ片道２時間かけて何度も出向き、部屋の始末をします。

愛知県は車社会なので息子が母親を車でどこへでも送迎しましたが、 今は往復５時間かけてヨタヨタと通院します。

「息子いないと生きてけないから、私ブラジル帰るかな思います。ブラジル？なんもないよ。どうする、わからないけど、日本で独りぼっちだもの、息子のそばにいて死にたいよ。」

日本人の血が流れている。 家族とともに人生の殆どを日本で生きてきた。 でもたった一度の過ちで服役したら、荷物も持てず家族に別れも告げられず、地の果てへ捨てられる。

こんな世の中だからこそ
国際協力に力を注ごう

佐藤さん母子の悲劇のなかで、教会の存在意義に改めて気づかされたことがあります。それは「助ける気持ちを大きく持てば、瞬く間に国境を越えて助け合う力は発揮される」です。佐藤さんの息子がどの航空便でいつブラジルに到着するのかを聞き、私たちはブラジル通の聖職者を通じてサンパウロの司祭を紹介してもらいました。

今回はアクセスに失敗しましたが、これまで何度も教会を通して人が助かった経験があります。

支援をお願いする時に大切なのは、「ブラジルで動いてくれるあなたへ日本の教会からせめてカンパをします」と礼節をわきまえる姿勢でしょう。「初めまして、あとよろしく」と丸投げして何の痛み分けもしなければ、「厄介な問題を押し付けただけ」です。つながった現地の人や教会を支援する具体策を示してはじめて「国境を越えた助け合いネットワーク」は成り立つし良い関係性が生まれるのです。



こんな世の中だからこそ、教会は力を発揮できるはずだと信じて、これからは国際協力の運動に力を注ぎたいとシナピスでは考えています。

２０２５年、聖年の年に

クリスチアーナ・オリンガ　佐藤 睦子

２０２５年、聖年の年に私は２か所を巡礼しました。８月は一人で、広瀬川殉教碑、９月には岩手の大籠教会へ行きました。大籠教会へは、東仙台教会のバスツアーで行きました。巡礼をして、改めて殉教者と信仰、希望そして天国について黙想しました。

広瀬川では、すべての人の平和を祈りました。殉教碑を見上げたら、農民代表の方と目が合いました。彼の顔は笑顔でした。その顔を見て、私は、うれしくなりました。彼の笑顔は、天国からの笑顔だと思いました。「天国で、また、会いましょう」と祈りました。

大籠教会へ行くまでは、私は、「踏み絵」を踏むことを考えていました。たとえ、踏んだとしても、信仰を捨てるつもりはなかったからです。表面的な行動をしても、人の本当の心は変わらないと思っていました。しかし殉教の地を訪れ、私の考えは変わりました。

私は「踏み絵」は踏みません。私の信仰宣言です。
現代社会の日本では、殉教はありませんが、偏見や差別は根強くあります。でも、私は大丈夫です。なぜなら、そのような苦しみをのりこえる力を、天国の殉教者たちが応援してくれているからです。祈りを通して、天国と一つになれます。当時の農民や労働者には、現代の私たちの想像以上の苦しみがあったことでしょう。彼らの死が、どんなに悲惨で悲劇的なものであっても、彼らは希望の光につつまれて、天国に行ったのです。

わたしたちは、恐れません。なぜなら、わたしたちにはイエス様がいて、マリア様もヨセフ様もいるからです。希望の光は、聖霊の光です。わたしたちは、ただ父なる神様のもとへ立ち帰るだけなのです。天国に帰るのです。これらが、巡礼をして、私が感じたことでした。神に感謝。

（２０２５年１２月２８日（日）
「聖年の扉、閉幕式」での「聖年の恵みを感謝する集い」で発表されました。）

ISHINOMAKI CITY MUSEUM

石巻市博物館

開館5周年記念イベント



と　き：令和８年１１月３日（火・祝）
ところ：石巻市博物館常設展示室
　　マルホンまきあーとテラス小ホール
内　容
①博物館常設展示無料開放　9：00～17：00
　　（最終入館16：30）
②「石巻と映画」上映会
　10：30～　昭和初期の石巻
　11：30～　たまえちゃんのリードオルガン
　14：30～　潮音　ある愛のかたみ
③講演会「映画とわたし」　13：30～
　講師　当館名誉館長　阿部　和夫



石巻市博物館
石巻市開成１－８
電話：0225-98-4831

ICM_ISHINOMAKIMUSEUM

1998.12.16

石巻かほく　平成10年12月16日（水曜日）（日刊）（毎週月曜日休刊）

日覚めたらお宝、オルガン

日本には1台だけ

120年以上前、米国製

石巻栄光教会



120年以上前に作られた米国製のリードオルガン。併設する幼稚園でも使っていくという

石巻市南谷地の石巻栄光教会（細川敦牧師）でこのほど、百二十年以上前に作られた米国「バーデット社」製のリードオルガンが見つかり、河南町在住のオルガンビルダー勝細逸之さんが修復を行った。専門家によると、「バーデット社」のオルガンが日本で見つかったのは初めてで、現役で使える米国製リードオルガンとしては国内で二番目に古く、極めて貴重だという。

見つかったオルガンは高さ約百二十七、幅約百十七、奥行き約六十七の中型。鍵盤数は六十一。音色を調整するストップノブが七つ付いている。

バーデット社は一八六六年（慶長二年）―一九〇七年（明治四十年）まで米国でオルガンを製造した会社。オルガンの製造年は不明だが、パテントリスト（特許一覧）から明治九年か十年ごろの製造とみられている。

所有する石巻栄光教会は、明治二十年に日本クリスチャン教会として石巻中央に誕生し、昭和五十二年に現在の場所に移転した。オルガンがいつから教会にあるのか、正確な資料は残っていないが、明治二十年の設立時に、宣教師ジョーンズが米国から持ち込んだのではないかとみられている。その後、昭和四十五年から信者宅にあったが今年九月教会に戻り、修復を進める中でオルガンの価値が分かった。

勝細さんは「汚いオルガンというのが第一印象。解体するうち素晴らしい作りであることが分かった」と話す。材料はクルミの木一枚板。ふいごなども修理すれば今後百年以上使えるという。

これまでに国内で五百台以上のリードオルガンを調査している佐藤豪平・立教女学院短大教授は「国内で現役で使える米国製オルガンとしては、明治七年に作られた京都にあるオルガンに次ぐ古さ。バーデット社製として日本初ということもあり、非常に価値が高い」と発見に驚いている。

教会では、二十三日午後六時からのクリスマスコンサートでオルガンをお披露目する。入場無料。

河北新報　平成10年(1998年)12月16日（水曜日）

120歳オルガン今も現役

石巻の教会　米社製では国内最古級

石巻市南谷地の石巻栄光教会（細川敦牧師）で、明治十年ごろに作られた米国「バーデット社」製リードオルガンが見つかった。現役として使える米国製リードオルガンでは国内で二番目に古く、同社製のオルガンの価値は日本で初めて。専門家も「大変貴重なもの」と驚いており、教会では、二十三日のクリスマスコンサートでその音色を披露する。

宣教師持ち込む？

オルガンのサイズは、高さ約百二十七、幅約百十七、奥行き約六十七。鍵盤数は六十一で、音色の佐藤豪平・立教女学院短大教授（若柳町出身）によると、「バーデット社」は一八六六年（慶長二年）―一九〇七年（明治四十年）に米国でオルガンを製造した会社。日本では知られていないが、佐藤教授は「米国のガイドブックではページ数を割いて取り上げられており、大切にされたメーカーではないか」という。現在、同社に関する資料を米国から取り寄せている。

製造年は、オルガンに付いていた特許一覧から明治九年か十年ごろと推定されている。国内には120年以上前に作られた「バーデット社」製のリードオルガン。演奏するのは修復に当たった勝細逸之さん（58）＝市南谷地の石巻栄光教会＝



23日のXマスコンサートで音色披露

オルガンビルダー勝細逸之さんが修復。その価値が分かった。

リードオルガン研究家の佐藤豪平・立教女学院短大教授（若柳町出身）によると、「バーデット社」は一八六六年（慶長二年）―一九〇七年（明治四十年）に米国でオルガンを製造した会社。日本では知られていないが、佐藤教授は「米国のガイドブックではページ数を割いて取り上げられており、大切にされたメーカーではないか」という。現在、同社に関する資料を米国から取り寄せている。

製造年は、オルガンに付いていた特許一覧から明治九年か十年ごろと推定されている。国内には120年以上前に作られた「バーデット社」製のリードオルガン。演奏するのは修復に当たった勝細逸之さん（58）＝市南谷地の石巻栄光教会＝

石巻日々新聞　(7)　1998年(平成10年)12月22日　火曜日

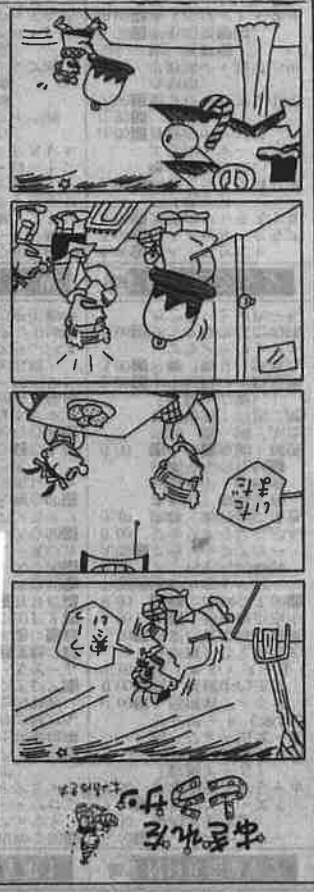
世界に6台のオルガン

メイフラワーで被露

石巻栄光教会

23日夜





Ⅲ. 昨年調査したBurdett Organ(日本基督教団石巻栄光教会所蔵)のエピソードをもとに創作した物語

日本の古いリードオルガン物語（一）

たまえちゃんのリードオルガン

佐藤泰平

私は古いリードオルガンです。音はかすかにしか出ません。外側はあちこち傷がつき、自分でもかなり気に入っていた左右の燭台もとっくの昔に失くなりました。もし、オルガンの中を見たいという人が来たら、私は「やめて！開けないで！」と叫んでしまいます。それほどいっぱいほこりがたまっているのを知っていても、私はどうすることもできなかったのです。

私の名前はバーデット（Burdett)。日本ではあまり聞き慣れない名前でしょう。アメリカのペンシルヴァニア州・エリーにあるバーデット・オルガン工場で生まれました。ストップは七つで、風箱に製品番号二〇四八四の数字が刻印されています。生年月日は覚えていません。でも多分、一八七七年頃の誕生ではないかと思います。もしその通りなら、今年（一九九八年)で私の年齢は百二十一歳になります。あまりに年を取り過ぎたせいでしょうか、この頃、私は本当にオルガンだったのだろうかと考え込んでしまうときがあります。私の記憶は鮮明なところとあやふやなところが、もうないまぜになっていますが、私が誕生してからのこと、たまえちゃんのことなどをこれからお話していきましょう。

私がエリーのオルガン工場で梱包されて最初に運ばれたのは、イリノイ州・ロックフォードの小さな教会でした。教会の人たちが私を待っていて、頑丈な木箱から私が顔を出したときの大歓声、すぐに皆で歌った讃美歌も覚えています。

それから十年後、教会のある青年が日本の伝道のために働く決心をして宣教師になりました。教会の人たちは青年に私を日本に連れていくよう熱心にすすめたのです。教会の物置に大事にしまって置いた木箱にまた入れられ、私は長い旅に出ました。数日間は汽車に揺られ、サンフランシスコからは船に乗せられました。暗い船底に閉じ込められたままです。誰れにも話しかけず、誰れからも話しかけられず、また、ぶつぶつとひとりごとも言えないつらい毎日が続きました。

ロックフォードを出発してから約一カ月半後、無事に横浜に着きましたが、すぐ小さい船に積み替えられ、やっと陸揚げされたのは、宮城県の石巻という活気のある港町でした。

宣教師さんと私が落ち着いたのは石巻の教会です。教会といってもそのときはごく普通の民家を借りて使っていました。ですから私が置かれた部屋も板敷きではなく畳です。最初の日曜日の礼拝には、ロックフォードの教会のときよりも多勢の人たちが集まり、私をとり囲んで口々に言います。

「あらららあ、立派だごだやあ。」
「この風琴、アメリカがら来たんだどやあ。」
「風琴でねえんだど。こいづオーガンっていうんだどお。」
「どいうな音っこ出んだべなやあ。」
「早ぐ聞がせらいんちゃやあ。」
「ほだほだあ。おらも早ぐ聞ぎでぇやあ。弾いでけらいんちゃやあ。」

そして宣教師さんは割と上手に弾きました。といっても、左手は右手と同じふしを弾くのです。少しやさしい曲では、左手はその調のドミソだけを押しっぱなしで弾きます。曲の出だしと曲の途中の数カ所、それに肝心の終わりが右手の音ときれいにとけ合って響くわけですから、それはそれでいいことにしておきましょう。ところが音が濁るときには眉を寄せ、音が合ったときにはホッとした顔をする音感のいい人もいました。私のすぐ前で熱心に歌っていた若い人です。宣教師さんはもう夢中ですから、その青年の表情の変化に気づく余裕など全くありませんでした。

私はそれ以後、毎週日曜日の日曜学校・朝の礼拝・夕方の礼拝や祈祷会での仕事、また、あちこちの信者さん宅で開かれる家庭集会に荷車に乗せられて参加するなど一生懸命に働きました。もちろん、平均して年に四・五回ぐらいある結婚式やお葬式でも私は精一ぱい歌いました。

歌といえば最初の頃、おかしく思ったことがあります。「エンヤードットゥ、エンヤードットゥ、まつしーまーの…」と、世に知られたご当地の民謡を歌うときには、大きく口を開け、つやのある声で気持ちよさそうに歌う人たちが、なぜか讃美歌になると口を開けずに歌うのです。ですからちょっと陰気でくぐもった声になってしまいます。折角いい声を持っているのに惜しいなあと思っていましたが、いつの間にか私もそんな声に馴れてしまいました。

何十年も働き、私はすっかり老けてしまいました。リードにはほこりがつまり、音の出ない鍵盤が増えてきました。風袋の角々に穴が開いたために、どんなに素早く交互に踏板を踏んでもすぐに風が逃げていきます。無理もありません。私が石巻に来てから八十二年も過ぎたのに、本格的な修理をする人に私はまだ出会ってなかったのです。石巻に来た頃の私の元気な音を知っている人はもう誰もいません。大修理さえすればまたしっかりと歌い出すと考える人もいなかったようです。

エレクトーンが流行っていた頃、教会は礼拝堂を週の何日か、ある音楽教室に貸しました。そしていつの間にか、私の代わりに教師用の電子楽器が礼拝で使われるようになったのです。当然、私の出番はなくなりました。

ちょうどその頃、教会学校の礼拝でオルガンを担当するようになればと牧師夫人が考え、オルガンを教えていた教会学校の生徒がいたのです。相澤たまえちゃんという小学六年生の素直な女の子でした。やがて、オルガンを勉強するには家に楽器がある方がいいという牧師夫人のすすめもあって、私はたまえちゃんの家に引っ越すことになりました。たまえちゃんも、お家の人たちも、あまり音の出ない私をよくぞ迎えて下さったと思います。

次の年に、教会はリードオルガン購入のためのバザーを開いたりしながら、十一ストップのヤマハ・リードオルガンの新品を買いました。

それからの数年間、私は二階のたまえちゃんの部屋で二日に一度はたまえちゃんと一緒に歌えたのでとても幸せでした。譜が読めるたまえちゃんはハ長調の「ひかりひかり」、ヘ長調の「いつくしみ深き」、変ロ長調の「きよしこのよる」などを楽譜通りに弾くのです。鍵盤をしっかりと深く押しながら、思うように音を出せない私の分までたまえちゃんは明るい、やさしい声で歌うのです。そして歌の終わりには必ず「アーメン」を付けました。私はそれを聴くたびに鳥肌が立つようにぞくぞくっとしました。衰えた私の耳に「いつかあなたも私と一緒に力強く『アーメン』と歌える日が来ますように」と神様にお祈りしながら歌っているように聴こえたからです。

たまえちゃんが高校・大学と進むにつれて、私と歌う回数はめっきり減りました。それも仕方がないことです。念願の国際線のスチュワーデスになってからは、年に一回か二回ぐらいしか会えませんでした。

ある日の深夜、下の様子が変なのです。二階の壁際にいる私のところにも異様な雰囲気が伝わってきました。低い声が、それも緊張した声がひっきりなしに聞こえてきたのです。

後で分かったのですが、東京から電話が入り、たまえちゃんの乗っていた車が事故に会い、たまえちゃんが亡くなった、とのいたましい知らせが届いたのでした。

石巻でのお葬式には、私は何の役にも立ちませんでした。二十五歳でこの世を去ったたまえちゃんに、一緒に歌った讃美歌を歌ってあげられなかったのが、とてもとても残念でした。

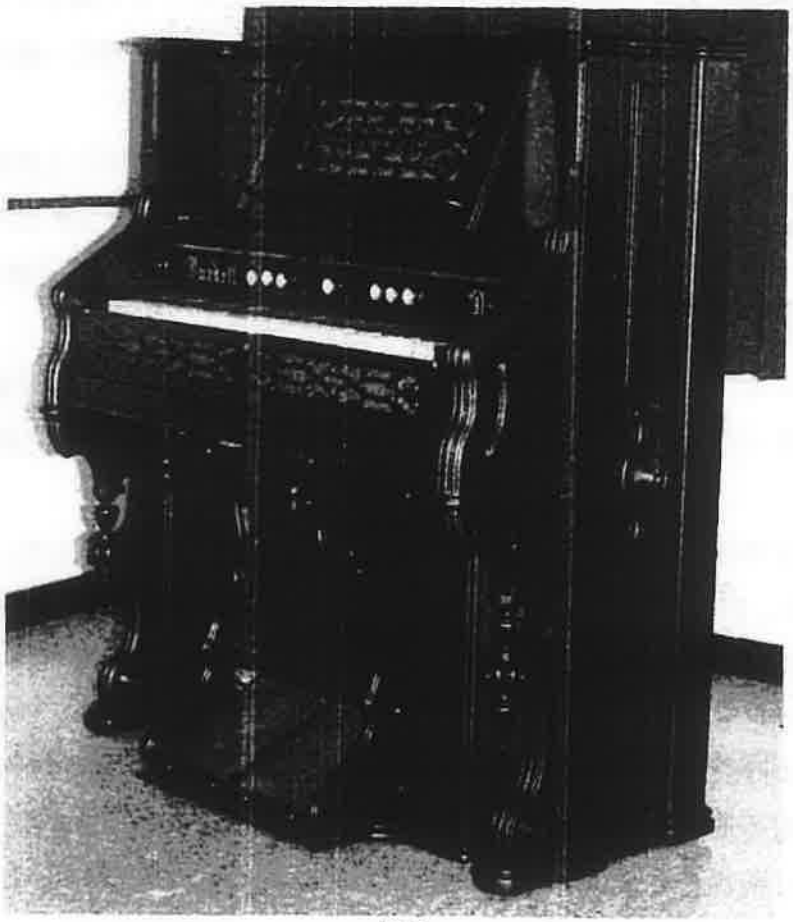
私はそれから十五年の間、たまえちゃんの部屋でじっと眠り続けていました。教会に戻していただけませんかと、牧師さんが訪ねていらしたときに、ご両親は「たまえの形見ですから…」と、はっきりお断りしたようです。

突然、今年の九月十一日、教会の牧師さんと楽器店の人たちが来て、私は二階からおろされ、そのまま、河南町の勝浦オルガン工房に運ばれました。私を教会に戻した方がいいだろうと、たまえちゃんのご両親がそうお考えになったのだと思います。車に乗せられた私を見送るご両親のお気持ちはどんなに切なかったことか、考えるだけで私の胸は痛みます。

勝浦さんは私を分解し、きちんと手入れをして、昔のエリーの工場のときのように整然と組み立てて下さることでしょう。風袋も新しく貼り替えて丈夫な肺にしてくれるはずです。そうなれば、ロックフォードで張り切って讃美歌を歌ったあの時のように若々しい声で歌えるかもしれません。もし、歌えるようになったら、どんな歌よりもまず最初に、たまえちゃんと一緒に歌っていた「ひかりひかり」と「いつくしみ深き」を歌いたいのです。そしていつか、誰れか弾いて下さる方がいたら、ギルマンという人が作曲した「葬送行進曲と天使の歌」をたまえちゃんのために心を込めて歌いたいと願っています。

私はもう生まれ故郷のアメリカには帰りません。日本の、石巻の教会で私の長い生涯を終えることにします。二日に一度は、たまえちゃんが好きだった讃美歌を歌いながら…。

「いつくしみ深き　友なるイエスは、
われらの弱きを　知りて憐む。
悩みかなしみに　沈めるときも、
祈りにこたえて　慰めたまわん。
アーメン」



Burdett Organ（日本基督教団石巻栄光教会所蔵）